

肝ドーム下病変に対する横隔膜切開を伴う胸腔鏡下局所凝固療法の有用性

熊本大学病院 消化器外科

新田英利、秋山貴彦、丸野正敬、東孝暁、高城克暢
橋本大輔、近本亮、別府透、馬場秀夫

背景：肝ドーム下肝表の病変に対して胸腔鏡下で横隔膜を切開し局所凝固療法を行う手技（Thoracoscopic local ablation therapy: TLAT）を行っており、その安全性、有用性について検討する。

対象：1995年～2014年に横隔膜切開を伴う TLAT を施行した 60 例を対象とした。

方法：全身麻酔下、分離肺換気下に手術を行った。肋間に 3 か所ポートを留置した。内視鏡下エコーで経横隔膜的に腫瘍を同定し、腫瘍直上の横隔膜を切開した。腫瘍および腫瘍周囲を十分に凝固し、横隔膜を縫合閉鎖した後、胸腔ドレーンを留置し終了した。

結果：手術時間と出血量の中央値は 219 分、5 g であった。合併症を 6 例に認めたが手術関連死亡はなかった。局所再発率は 3.3% であった。

結語：肝ドーム下病変に対する胸腔鏡下 RFA は安全かつ有効な手法の 1 つと考えられた。